



流体的近代と集合住宅

饗庭 伸

首都大学東京都市環境学部准教授

あいば・しん●1971年生まれ。早稲田大学理工学部建築学科卒。川崎市役所専門調査員、早稲田大学助手を経て現職。専門は都市計画・まちづくり。編著『初めて学ぶ都市計画』市ヶ谷出版、『住民主体の都市計画』学芸出版社ほか

はじめに

年始の里帰りの機会に私が生まれ育ったところを歩いてきた。阪神間のベッドタウンとして発達した西宮市の海に近い、酒蔵と、阪神電車と、住宅地とヨットハーバーでできているところである。

阪神間の市街地は、北側の六甲山系と南側の瀬戸内海に挟まれた平地に形成された。平地は大阪から神戸まで東西に長く、山と海に挟まれて南北は短い。山から海へ南北に流れる幾筋もの小河川が小さな圏域をつくっている。私の両親は神戸で生まれ、その後に西宮に移り、夙川という小さな河川の流域の中でライフステージに合わせて何度か転居して暮らしてきた。格別変わった人生ではないと思うが、どの人も違うように人生は固有であり、都市の中にその人生を置くと、都市形成の一つの断面を鮮やかに切り出すことができる。

私が見に行ったものは、ちょうど私が生まれる直前の1970年までに兄と両親が住んでいた集合住宅と、その後に転居した私の生家となる戸建て住宅のあった住宅団地である。二つは同じ不動産開発会社が1970年前後に開発したもので、一本の幹線道路を挟んで隣りあっている。集合住宅は、当時はまだ珍しくて注目を集めるものだったそうだし、一部がメゾネット住戸になっているなど、民間による集合住宅開発の黎明期に大衆のニーズを探りながら設計されたものだったのであろう。

両親は1968年に開発されたその集合住宅の55平米の一室を購入し、子どもが増えて手狭になると考えて、窓から見えたところに開発された戸建て住宅を購入した。当時の価格にして、集合住宅は約500万円、戸建て住宅は約1000万円だったとのことで、戸建て住宅の購入の際に集合住宅を売却して半分をカバーし、残りはローンを組んだという。小さな庭が付いたその家で私は10歳までを過ごしたが、その後に両親は夙川の上流に新しく開発された土地に住宅を建てて転居した。ご多分にもれずバブル経済下の地価高騰の恩恵にあずかり、戸建て住宅は4000万円で売れたそうだ。築10年の生家のその後は、これも極めてありふれた結末だが、あっという間に取り壊され、別の戸建て住宅がそこに建てられた。

集合住宅と戸建て住宅

集合住宅と戸建て住宅の開発から40年を経たこの界限をあらためて眺めてみた。集合住宅はさすがに古びて見えるが、空室があるわけではなく、きちんと使われていることが外観から見てとれる(写真1)。風格とまでは言えないまでも、この集合住宅が40年間変わらない空間としてそこに存在し、一つの景観になったことが分かる。

変わってしまったのは戸建て住宅団地である(写真2)。かつては同じデザインの建売り住宅が並んでいたが、生家にかぎらず、沢山の住宅が



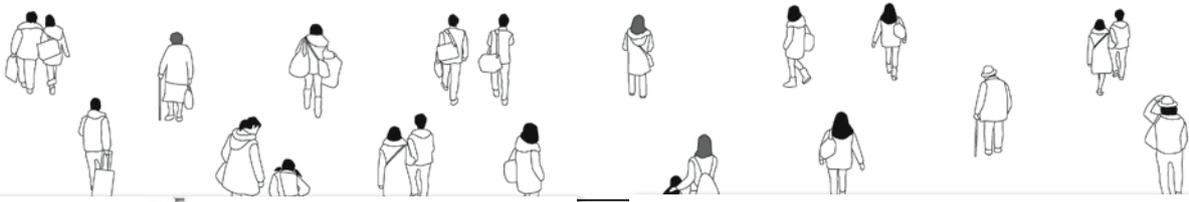


写真1



写真2

すでに転売され、そのほとんどが建て替わってしまっていた。宅地が分割され、それぞれに小さな3階建ての住宅がつくられているところもある。

このことは、きわめて単純な事実を示している。それは、集合住宅は40年かけて安定した景観を形成し、戸建て住宅は40年かけても景観を形成しなかった、ということである。都市計画や建築を少しでも専門にする人からすれば、少し意外な事実だろう。集合住宅の開発なんてものは、戸建て住宅が建ち並ぶ落ち着いた景観の地域にとって異物であり、しばしばそれは反対運動の対象にもなる。戸建て住宅は変わらない景観の象徴であり、集合住宅は変化する景観の象徴である。しかし、私の経験の中にある一つの景観だけを切り出してみると、それは逆転しているのである。

戦後の住宅政策の枠組みも思い起こしてみよう。かの有名な「住宅双六」には、最初はアパートからスタートし、やがて賃貸集合住宅に移り、分譲の集合住宅を経て、庭付きの戸建て住宅に移るという住み替えパターンが示されている。その中で集合住宅は過渡的な住まいであり、戸建て住宅こそゴールであった。そこから、戸建て住宅がゴールとして安定した空間であることがイメージされるが、40年経った現在にはっきりと分かることは、過渡期を支える集合住宅こそ変わらない空間であり、逆にゴールの空間が安定しない空間であったということである。

日本の都市空間

法隆寺を見ても分かるように、きちんと手入れと修繕さえすれば、建物の物理的な寿命は人の寿命よりも遥かに長い。しかし、日本の建物の平均寿命は約40年であり、これは寿命が物理的な要因だけではなく、社会的な要因に強く影響されるからだ。集合住宅の変化のなさと戸建て住宅の不安定さの背景にある、物理的な要因と社会的な要因の違いを見てみよう。

社会的な要因の違いは、建物の使用を判断する主体の違いが大きい。戸建て住宅はたいていは一人や二人で所有されており、それを売却したり取り壊したりする判断形成は簡単にできるが、区分所有される集合住宅は数多くの主体が所有しており判断の形成は難しい。これらのことが、集合住宅の変化のなさと戸建て住宅の不安定さの背景にある。

物理的な要因は、鉄筋コンクリートなどでつくられる集合住宅の「壊しにくさ」、木や軽量鉄骨などでつくられる戸建て住宅の「壊しやすさ」はもちろんあるが、戸建て住宅の「つくりやすさ」にも留意したい。戦後の経済成長にあわせて、人々が住宅に求めるスペックやデザインは速いスピードで変化してきた。建材や設備は新しいものが常に開発され続けたし、ハウスメーカーは人々の欲求を巧みに先導し、様々な欲求に応じて安価に戸建て住宅をつくる仕組みを発達させてきた。集合住宅





もこうした変化に対するいくつかの解答をつくりだしたが、戸建て住宅は集合住宅よりも遥かに多くの欲望に詳細に的確に応え続けたのである。

人々の欲望に対して、忠実に応え続け、柔軟に空間そのものを新陳代謝させ続けるのが戸建て住宅であり、対する集合住宅は変化に対して動きが鈍く、都市の空間を固定化させる方向に作用する。結果として、変わり続ける戸建て住宅と固定化する集合住宅という組み合わせが日本の都市空間となった。

こうした都市空間を、私たちの社会は戦後の70年をかけてつくり続けてきた。しかし、つくり続けるモチベーションは人口増加であったため、これから先の人口減少社会では都市空間の変化のスピードは落ちていく。住宅ははっきりと目に見えて余っており、自家用車くらいの価格で取引されている中古住宅も少なくない。新しい住宅をつくるモチベーションは漸減し続け、戸建て住宅の新陳代謝のスピードは落ち、集合住宅はより重たい錨で土地につなぎ止められることになる。

家族とコミュニティ

リキッド・モダニティ＝流体的近代という言葉がある。ポーランド出身の社会学者ジークムント・バウマンが2001年に発表した同名書でつくりだしたこの言葉は、現在の社会の状態を的確に表現する言葉として繰り返し参照されてきた。かつての近代化はそれ以前の凝り固まった社会を溶解するものであったが、それ自身がより堅固な仕組みをつくり上げてしまった。それに対して「近代的

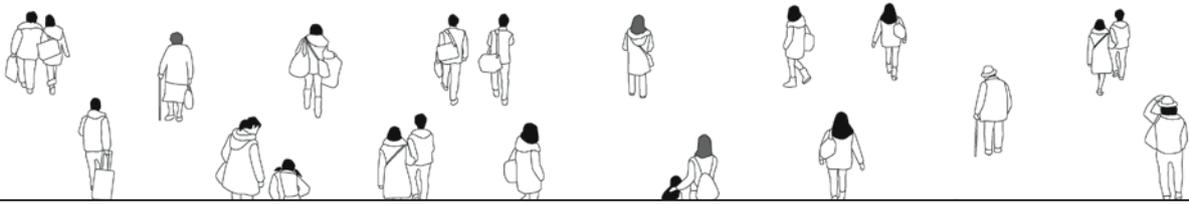
「溶解力」のいわば再配分、再配分がおこっている」として、個人を中心に、個人が範型と形式をつくりだす、より流体性の高い近代社会になっている、ということがバウマンの主張である。

「小家族都市」という言葉を考えた人も、リキッド・モダニティが指し示すものが念頭にあったはずだ。家父長的な家族はかつての近代化の過程で溶解の対象とされたが、代わって登場した近代家族も、近代の堅固な仕組みの基礎的な単位となってしまった。溶解力こそが近代化の本質であるというバウマンの主張にたてば、家父長的な家族から近代家族へ、そして近代家族からそれが溶解したより流体的な家族へということが導きだせる。つまり、個を中心とした関係の集合として家族を捉え、個人の動機や必要性に合わせて離散集合する、より溶解しやすいものとして家族を捉えるということである。「小家族」という言葉には、家族の小規模化という意味が込められているが、本質的には規模の大小ではなく、家族の関係性の変化が問題なのである。

また、バウマンはリキッド・モダニティにおけるコミュニティを「クローク型共同体」という言葉で表現する。

「劇場にでかける人間は、服装のそれなりの決まりにしたがって、普段着と異なる服を着る。こうした行動は劇場にでかけること自体を、「特別な出来事」とするのと同時に、劇場にあつまる観客を、劇場の外にいるときとは比べものにはならない均一な集団に変える。(中略)しかし、最後の幕が降りると、観客たちはクロークから預けたも





のをうけとり、コートを着てそれぞれの日常の役割にもどり、数分後には、数時間前に出てきたまちの雑踏のなかへ消えていくのである。」「クロック型共同体はばらばらな個人の、共通の興味に訴える演目を上演し、一定期間、かれらの関心をつなぎとめておかなければならない。(中略) 関心はただ集められただけで、新しい特性を獲得することもなく、演目がつくりだす共通の幻想は、公演の興奮がさめると雲散霧消する。」(ジークムント・バウマン／森田典正訳 (2001) 『リキッド・モダニティ』大月書店 p.257 ~ p.258 より抜粋)

流体化した社会におけるコミュニティは、仮設的、時限的な関係に過ぎず、そこでの演目が面白いかどうかでその成否が左右される、このような乾いたイメージがバウマンが示すリキッド・モダニティにおけるコミュニティである。

バウマン自身は、この状況を肯定的にも否定的にも捉えていない。ただ、そうになってしまう、そういう大きな流れを理論的に述べているだけである。そこから悲観的な未来を描くこともできるが、暗い話をしても仕方がないので、楽観的な未来、つまり流体化した家族やコミュニティと、その容れ物である我が国の都市空間の組み合わせによって、何が可能になるのか、ということを考えていきたい。

容れ物と流体

日本の都市が成長していた時代、都市計画や建築計画という学問が発達した。容れ物をいかにうまく設計するか、という学問である。こう

した学問にとって、家族とコミュニティは重要である。どのような家族がそこに暮らすか、どのようなコミュニティがそこに生まれるかということが、設計の根拠となるからだ。住宅や都市が不足していた時代には、とにかく速いスピードで容れ物をつくり続けたいといけなかったから、根拠が必要だったのである。

これらの設計は、おおよそ狙い通りに作用した。2人用の住宅は2人の世帯に飛ぶように売れ、5人用の住宅は5人の世帯に飛ぶように売れた。当初は単純なものであった計画理論は、やがて巧みに人々の欲求に応えるようになり、それを先導するようにもなった。欲求が多様化して読みにくくなると、市民参加や住民参加が導入され、よりきめ細かく対応できるように設計の技術は修正された。つまり、設計をする時には容れ物は中味を想定してつくられ、その通りの中味が容れ物に入る、という形で二つはぴったりと一致していたのである。

しかし、社会はどんどん流体化し、容れ物が中味に対応するには限度がある。戸建て住宅は激しい新陳代謝で容れ物自体を流体化させてきたが、それにも限度があるし、集合住宅は流体化に抗うように建ち続ける。人口減少下で、容れ物の新陳代謝のスピードが落ち、容れ物と流体のギャップはますます広がっていく。

つまり、家族やコミュニティの流体化に容れ物はないといえず、二つを一致させることは不可能となり、容れ物と中味を分けて考えることを前提としなくてはならない。都市計画や建築計画が無



意味になるということではない。建物と家族・コミュニティの組み合わせの数が圧倒的に増え、そこに大量の、規格化できない設計が発生するのである。例えば、住宅を小さく区切って10人が住むシェアハウス、都会に幾人もの相続人がいる田舎の大規模な空き家など、容れ物と中味のギャップが顕在化している例も多い。これらは都市問題なのかもしれないが、逆に、容れ物と中味の一对一の関係の呪縛が解き放たれたということでもあり、そこに新しい可能性が開けているとも言える。

建物は流体の流れを調整することができる。流体を均質なプールに入れてしまうか、そこに流れを与えるか、建物は流体的な家族やコミュニティの、少なくともその外形だけは規定することができる。では、集合住宅とコミュニティの分離と組み合わせによって、どのような可能性が広がるのであろうか。

ゲートッドコミュニティを溶かす

4年ほど前のこと、台湾のある都市の中心部のある集合住宅群に案内していただいた。新たに開発される建物の足元にオープンスペースを設けることによって、都市計画で定められた容積率よりも大きな建物をつくることができるようになる、という日本の総合設計制度と同じような制度がその都市にもある。ある開発業者がこの制度を使い、複数の大規模集合住宅を開発した。それぞれの集合住宅の足元にはオープンスペースが設けられ、本来はそこに連続した広々とした空間が生まれるはずであった。しかし、開発業者はそのオー



写真3

ブンスペースと街路の間に、集合住宅の敷地を囲むようにして鉄製の柵を設ける。いわゆるゲートッドコミュニティである。一連の開発全てが一つの柵で囲まれたのではなく、個々の建物それぞれが異なる柵で囲まれてしまい、小さなゲートッドコミュニティが独立した群島のように存在する空間がそこに生まれてしまった(写真3)。

このゲートを政府が問題視し、そこに調整役のコミュニティプランナーを派遣する。それぞれの居住者の納得を得て、全てのゲートを撤去するためである。容れ物と中味の関係を固定的に考えていたら、群島のようなゲートッドコミュニティは政府にとってリスクである。ゲートの内側ではコミュニティができるが、それぞれは孤立する。人々はゲートの内側で生活を完結するようになり、群島が浮かぶ海の部分、つまり街路空間は最低限の通過をこなすための空間となり、そこに活気は誕生しない。まちとしてのコミュニティはできそうにない。そうならないためにゲートを撤去してしまおう住民の合意を取り付けることが政府の指示であった。しかし、コミュニティプランナーは、新しい仕組みをつくることで、ゲートを撤去することなく、その内側も、外側も豊かにすることに成功する。

仕掛けは単純である。彼女はそれぞれの集合住宅に設置されている集会室を使って、住民達が

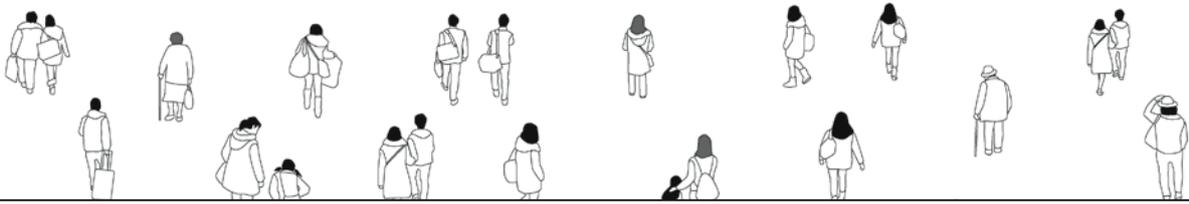


写真4

自分の得意なことを他の住民に教える「社区大学」(社区にはコミュニティという意味がある)を立ち上げる。社区大学は台湾のまちづくりの中でよく使われる手法であるが、彼女が工夫したのは、全ての集合住宅の住民に共通する「学生証」を発行し、それをゲートに常駐している警備員がチェックをすることによって、ゲート間の行き来を可能にした、ということである。つまり、ゲートはそのままにして、そこを行き来する人たちの流体性を高めたのである。この仕組みは成功した。社区大学では多くの講座が立ち上がり、人々がゲートを超えてお互いの集合住宅を行き来するようになった。人々は全てのゲートの警備員と顔見知りになり、警備員は、自身の仕事として、無理なく高齢者の見守りにも取り組むようになった。

そもそも人々は流体化を指向している。人々は自分が知りたい話、得たい知識のために学生証を持ってゲート間を行き来する。筆者が訪問した時にはたまたま日本語教室が開かれていたが、そこには様々な集合住宅から集まって来た人たちが勉強していた(写真4)。彼らは日本語を勉強するという目的のために集まり、それが終わったら離散してしまう。まさしく小さな「クローク型共同体」である。ゲートは流体を遮断することなく、流体の流れを細かく「安心や安全」に向けて制御する弁

のような役割を果たしている。集会室やゲートという容器と流体との関係をうまくデザインすることによって、流体の流れを整えることに成功したのである。

多くの台湾のまちと同様にこのまちにも廟がある。さすがに廟まではゲートに囲まれていないのであるが、案内されて訪れたその廟は、他のまちにある廟と同じように、あるいはそれ以上にまちの人にきちんと敬われているように感じられた。廟に行くまでの道すがら、ゲートとゲートに挟まれた街路にはゲートの内側から持ち出された鉢植えの緑が並んでいる。流体に対するちょっとした仕掛けが、まちの空間全体を豊かにしていたのである。小さな事例であるが、集合住宅とコミュニティの分離と組み合わせによって生まれる可能性の一つを理解いただけたらどうか。

おわりに

本稿ではまず戦後の日本の都市形成過程の中で、集合住宅の意味が変質してきたことを述べた。ついで、リキッド・モダニティという考え方に基づいて、集合住宅という容器とその中味となる流体化したコミュニティを、分離して組み合わせることによって、新しい可能性が開けることを台湾の事例も使って述べた。集合住宅が持っている本質的な重さは、流体の流れを戸建て住宅よりも規定することができ、そこに多くのデザインの可能性が広がっている。本稿の主題である「小家族都市と集合住宅のコミュニティ」に対する筆者の答えである。

